

## 形容詞節に転用可能な副詞節の意味制約

### A Semantic Constraint on Adverbial Clauses Usable as Adjectival Clauses

志澤 剛  
Takashi SHIZAWA

*Keywords* : adverbial clause, adjectival clause, contrastive domain/contrastive world

キーワード : 副詞節、形容詞節、対立領域/対立世界

#### 1. はじめに

通常は副詞節として機能する if 節が、名詞に後続して形容詞節のように振る舞うことがある<sup>(1)</sup>。

- (1) The outcome if John gets his way is sure to be unpleasant for the rest of us.  
(Lasersohn 1996: 155)

(1) では、条件節 if John gets his way が名詞句 the outcome を修飾しており、名詞句全体の解釈は「Johnが我を通した場合の結果」となる<sup>(2)</sup>。

条件節以外では、after、before、since、while などに導かれる「時の副詞節」や「様態」を表す as if 節も、形容詞節のように機能することがある。

- (2) a. ? The storm after you left was terrifying. (Ross 1973: 228)  
b. … he remembered Ron’s expression when he had seen her kissing Dean,  
(J. K. Rowling, *Harry Potter and the Half-Blood Prince*)  
c. Despite all the problems since we moved to Texas, we are so blessed to have the family and friends that we have.  
d. In order to prevent a political breakdown, he should shorten the period until he resigns.  
e. The TV shows while we were kids always had both slime and pies.  
f. Her face showed a look as if I had slapped her.

(2a) において、従属節 *after you left* は、名詞句 *the storm* を修飾しており、「君が発った後の嵐」といった意味を持つ。(2b) も同様に、従属節 *when he had seen her kissing Dean* が名詞句 *Ron's expression* を修飾し、「彼女が Dean にキスをしているのを見た時の Ron の表情」という解釈となる。(2c) では *since* 節が名詞句 *all the problems* を修飾し、「我々がテキサスへ移住してからの全ての諸問題」という解釈となる。(2d) では *until* 節が *the period* を修飾し、その解釈は「彼が辞職するまでの期間」となる。(2e) は *while* 節が *the TV shows* を修飾し、「私たちが子供だった頃のテレビ番組」という解釈である<sup>(3)</sup>。(2f) は、様態の *as if* 節が名詞句 *a look* を修飾し、「あたかも私が彼女を平手打ちしたかのような表情」となる。

大変興味深いことに、このような「副詞節の形容詞節への転用」が許されるのは、特定の意味範囲の副詞節、つまり、上で触れた「時」、「条件」、「様態」に限られていると見てよい。

- (3) a. \* We still remember the consequences because we fail.  
 b. \* Imagine the fuss even if I get enough sleep every day.  
 c. \* Never forget the war so that we could be independent as a nation.
- (4) a. Imagine the uproar if it is actually not locked.  
 b. \* Imagine the uproar unless it is actually locked.

(3a) は「原因」の *because* 節を、(3b) は「譲歩」の *even if* 節を、そして (3c) は「目的」の *so that* 節を形容詞節として用いることを意図した例であるが、いずれも非文である<sup>(4)</sup>。(4) は条件節であるが、名詞後位修飾節として *if* 節を用いた (4a) は問題なく容認されるのに対し、*unless* 節を用いた (4b) は容認されない。

ここまでの観察から、以下の疑問が生じる。

- (5) a. 一定の接続詞（「時」、「条件の *if*」など）によって導かれる副詞節に限って形容詞節として機能できるのはなぜか。  
 b. その一定の接続詞に共通する意味特性とは何か。

本稿は、(1) から (2) で例示された「副詞節から転用された形容詞節」を取り上げ、(5) の疑問に対する答えを意味論的観点から提示することを目的とする。本稿の主張は次のとおりである。

- (6) 形容詞節に転用できる副詞節は、それを導く接続詞の基本義が、対立領域・対立世界の存在を喚起させるものでなくてはならない。

詳しい議論に移る前に、ここで考察対象を明確にしておきたい。本稿では、動名詞句や動詞

派生名詞句を被修飾部とする例を考察対象外とする。

- (7) a. His having been arrested while he was strolling in the park [...]  
 b. There were lots of films of the destruction of the Twin Towers before they fell.

(7)の2例における下線部は、意味的或いは構造的に、命題としてのステータスを十分に保持していると考えられる。例えば、(7a)の動名詞句his having been arrestedには意味上の主語hisが明示されており、命題he was arrestedに意味上及び構造上対応していることは明白である。また、(7b)の場合、名詞destructionは動詞destroyの派生語であり、ofに後続する名詞は、意味上destructionの目的語となる。したがって、下線部は(someone) destroy the Twin Towersという命題に対応することとなる。このような場合、付加する節は明らかに副詞的であり、形容詞節として機能しているとは言い難い。

さらに、そもそも副詞節と形容詞節の区別は連続的であるとする立場もあり (cf. Croft (2001: 322))、どこかで境界を定めない限り議論が煩雑になる恐れがある。そこで本稿では、議論の便宜上、Ross (1973)の「名詞らしさの度合い (Nouniness Squish)」に照らし合わせ、名詞句の中でも最も名詞らしさの高い名詞、すなわち非派生名詞を被修飾名詞として用いている例に焦点を当てて議論する<sup>(5)</sup>。

また、紙幅の都合上、副詞節を導入する接続詞の全てを詳細に考察することは不可能である。したがって、本稿は、形容詞節の用法の実例を確認できている接続詞の中から、特に使用頻度の高いものに絞って考察する。

- (8) 考察対象となる接続詞 : after, before, since, till/until, while, when, if

## 2. 先行研究について

副詞節を転用した形容詞節を正面から取り上げた先行研究は、筆者の知る限り、ほとんどない。Ross (1973)、Haan (1989)、McCawley (1998)など、いくつかの研究によって事例自体は指摘されてはきたものの、その多くは、副詞節への関心ではなく、統語論の視点から、動詞(句)の名詞化に関心を向けたものである (cf. Chomsky (1970) 他)<sup>(6)</sup>。

さらに、当該現象に関係する個々の副詞節の中で、名詞化という観点以外から比較的詳しく分析されているものは、条件のif節のみである (cf. Lasersohn (1996)、志澤 (2010))。上で見たsince節、until節、while節の事例に至っては、考察されていないばかりか、その存在を指摘されたことすらほとんどない<sup>(7)</sup>。

また、当該現象が容認される理由について、「副詞節と意味的に等価な前置詞句」の存在 (while you were singing に対する during your singing) を前提とし、両者の機能的並行性から接近する分析が見受けられるが (cf. McCawley (1998))、(2f)のas ifなどは対応する前置詞

を想定することが難しいなど、(5)の疑問に明確に答えてくれるような定説を形成するには至っていない。したがって、次節以降、特定の先行研究に対する言及は必要最小限に留め、議論を進めていくこととする。

### 3. 形容詞節に転用可能な副詞節の意味的特徴

#### 3.1. after と before

本節では、形容詞節に転用可能な副詞節の意味的特徴を順次考察する。まずは、after と before のペアから見ていこう。

- (9) a. She always washes her hands **after** she gets home.  
 b. Let's clear the table **before** we watch TV.

一般に、after/before は、出来事間の順序・継起関係を表す。(9a)では主節の「彼女が手を洗う」という出来事が、従属節内の出来事「(彼女が)帰宅する」の後に起こることを意味している。一方、(9b)では、主節で述べられている「食器を片付ける」という出来事が、従属節内の出来事「テレビを見る」の前に起こることを意味している。今井・中島(1978:390)によれば、この用法の after/before は「期間の一時点」に言及するものであり、それぞれ以下のよう図示できる。



図(10)において、afterは「期間の開始時」を明示し、主節で表される出来事(●)が、その期間内の一点で生じることを表す。一方、beforeは「期間の終了時」を明示し、主節で表される出来事(●)が、その期間内の一点で生じることを示している。この意味特性は、after/before 節が名詞修飾で用いられる場合も保持される。

- (11) a. ? The storm **after** you left was terrifying. (= (2a))  
 b. The interval **before** she spoke was appreciable, and that was against the rules of the game. (志澤(2010:265))

(11a)では、「嵐」が「あなたが出発した」という出来事を開始時とする期間内に生じたことを表し、(11b)では、「彼女が話す」という出来事を終了時とする期間内に「合間」があったことを表している。

### 3.2. since

次に、since について見てみよう。since は、上述の after と同様に「期間の開始時」を明示する接続詞である。ただし、after と異なるのは、「期間の一時点」ではなく、「継続期間」に言及するという点である。

- (12) a. He has lived here since he became an instructor.  
 b. John has written three papers since he graduated from MIT.  
 c. John hasn't written a love letter since he was scolded by his father.

since は、「動作・状態の継続期間」に言及する。よって、修飾される主節は (i) 継続を表すもの、(ii) 瞬間的動作の反復を表すもの、(iii) 瞬時的動作の否定を表すもの、の内いずれかではなくてはならない(今井・中島(1978: 390-391))<sup>(8)</sup>。例えば(12a)の since 節は、「彼がここに住んでいる」期間の開始時が「彼が教師になった」時であることを表しているので、(i) に該当する。(12b)の場合、「論文を書く」という反復事象の継続期間の開始時が「MITを卒業した」時であることを表しているので、(ii) に該当する。そして、(12c)は、「ラブレターを書かない」期間の継続を表し、その開始時が「父親に叱られた」時であることを表すので (iii) に該当する。こうした since の意味を簡潔に図示すると、以下のようになる。



この「継続期間」という意味特性は、名詞修飾の since 節にも当てはまる。

- (14) As for myself, I cannot pretend that the time since we last corresponded has been equally fruitful or pleasant.

(14)の被修飾名詞 time は、漠然と時間を意味し、その意味において非有界的であるので、since の持つ「継続性」と矛盾なく折り合う。このことは、次の対比を見ると、さらに明確になる。

- (15) a. Despite all the problems since we moved to Texas, [...] (= (2c))  
 b. Despite !\*a/ \*the{ problem since we moved to Texas, [...]

被修飾名詞 problem が複数形で生起している(15a)は、問題なく容認されるが、一方 problem が単数形で生起している(15b)は、冠詞の違いに関係なく、容認されない。この容認性の差が生じる理由は、次の通りである。まず、可算名詞の複数形は、上で触れた「瞬間的動作の反

復」と並行的に捉えることが可能であり、「時間の幅」を想起させるため、since 節の持つ「継続性」と矛盾なく折り合う。しかし、可算名詞の単数形は、その有界的特性から、瞬間的動作と同様に「時間の幅」を持たないものと捉えられる。よって、上で挙げた、(i) 継続を表すもの、(ii) 瞬間的動作の反復を表すもの、(iii) 瞬時的動作の否定を表すもの、のいずれにも該当せず、since 節の修飾を受けることができないのである<sup>(9)</sup>。

### 3.3. till / until

次に取り上げるのは、till / untilであるが、以下では議論の便宜上、untilで代表する。untilも since と同様に「動作・状態の継続期間」に言及する。したがって、これによって修飾される主節は、(i) 継続を表すもの (e.g. (16a))、(ii) 瞬間的動作の反復を表すもの (e.g. (16b))、(iii) 瞬時的動作の否定を表すもの (e.g. (16c))、のいずれかでなくてはならない。

- (16) a. He waited **until** she appeared.  
 b. The guests arrived **until** the party started.  
 c. John didn't arrive **until** the party started.

そして、until は「継続期間」に言及するという点では since と並行的であり、「期間の終了時」を明示するものという点では、before と並行的である。図示すると以下のようなになる。



この「継続」という意味特性は、名詞修飾の until 節にも継承される。つまり、「時間的な幅」に矛盾しない意味を持つ名詞を修飾する。

- (18) a. In order to prevent a political breakdown, he should shorten the period **until** he resigns. (= (2d))  
 b. The mood **until** he appeared in the room had been pessimistic.  
 (19) a. \* The dog's death **until** she returned shocked her.  
 b. \* I still remember the beautiful chair **until** John broke it.

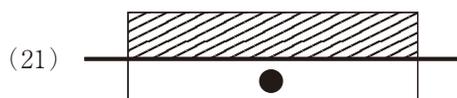
(18a) の下線部は、「彼が辞職するまでの期間」、(18b) の下線部は「彼が会議室に現れるまでの雰囲気」となる。どちらの被修飾名詞句も「時間の幅」に矛盾せず、until の言及する「継続期間」と無理なく折り合う。一方、(19) のように、瞬間的な出来事を表す名詞 (death) や、時間を喚起しないモノを表す名詞 (chair) は、いずれも「時間の幅」を喚起せず、容認されない。

### 3.4. while

while は「期間全体」を示す。今井・中島（1978: 390）によると、この「時の副詞節」を導く while には2つの意味がある。1つは、since や till/until と同様に、「継続期間」に言及するもので、もう1つは after や before と同様に、「期間の一時点」に言及するものである。

- (20) a. He kept eating **while** the party lasted.  
 b. He left **while** the party lasted.

(20a) は「継続期間」に言及する while である。つまり、「食べる」という行為が、パーティーが続いている間ずっと継続していたことを表す。一方の (20b) は「期間の一時点」の while である。つまり、パーティーが続いている間のどこか一点で「彼が（その場を）離れた」ことを表している。これを今井・中島（1978: 390）に倣って図示すると、以下のようになる。



図の上段が「継続期間」（つまり、(20a) の例）、下段が「期間の一時点」（つまり、(20b) の例）を表している。この2つの意味特性は、名詞修飾の while にも継承される。

- (22) a. The atmosphere **while** you eat is inviting, friendly, and comforting.  
 b. The fire **while** I was out shopping burnt up all my possessions.

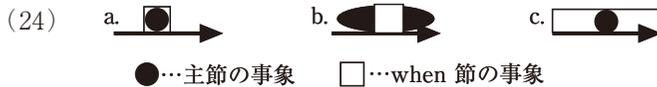
(22a) の下線部は「あなたが食べている間の雰囲気」という解釈で、食事の間継続している雰囲気を表している。つまり、図 (21) の上段の意味である。一方、(22b) の下線部は「私が買い物に出かけていた間の火事」であるから、図 (21) の下段、すなわち「期間の一時点」を意味している。

このことから、while が修飾できる名詞句は、while で表される期間内に発生する「出来事」としての解釈を許される名詞に限られることが予想される。その予測が正しいことは、次の例からも明らかである。

- (23) \* The dog while his master was away seemed lonely.

### 3.5. when

次に、when に移ろう。when の基本的な意味特性は、主節の事象と when 節の事象の「同時性」である。ただし、ここで言う「同時性」とは、必ずしも複数の事象の「時間幅」が一致していることを指すのではなく、次のいずれかに相当する。



- (25) a. John kicked the ball **when** the judge whistled.  
 b. Joe was living in Paris **when** they called on her.  
 c. Her father died **when** she was young.

図 (24a) は、主節の事象と when 節の事象の成立時が、少なくとも認識上、一致していることを表している。その具体例は (25a) となる。図 (24b) は、主節の継続的動作・状態の一時点に when 節が焦点を当てていることを表し、その具体例は (25b) である。図 (24c) は、when 節が一定の期間を表し、その期間内に主節事象が成立することを意味しており、具体例は (25c) となる。この意味特性は名詞修飾の when 節にも反映される。

- (26) a. I still remember the smile on your face **when** you tore me apart.  
 b. The mood in the room **when** she came in was almost festive.  
 c. The flood **when** I lived in Hawaii was a great surprise to me.

(26a) の下線部は「あなたが私の心をかき乱した時の笑顔」という解釈となり、図 (24a) に該当する。(26b) の下線部は、「彼女が入ってきた時の部屋の雰囲気」という解釈である。この場合、彼女が姿を見せる以前に部屋の雰囲気は何らかの形で確立しているものと考えられるので、図 (24b) に該当する。<sup>(10)</sup> (26c) の下線部は、「私がハワイに住んでいた時の洪水」であるから、when 節が表す一定期間内に起きたことを表すので、図 (24c) に該当する。いずれの場合も、肝要なのは、時間幅ではなく、「2つの事物・事柄に時間軸上の重なりがある」という点である。

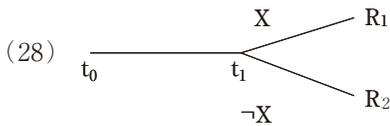
### 3.6. if

最後に、ifによって形成される条件節について考察する<sup>(11)</sup>。if 条件文が語用論的に多義であることは一般によく知られている (cf. Sweetser 1990 他)。しかし、志澤 (2010) によれば、if 節が名詞修飾の機能を果たす場合、「事態間の因果関係に基づく条件」、すなわち Sweetser (1990) で言うところの「内容領域条件 (content domain conditionals)」の解釈に限られる<sup>(12)</sup>。

- (27) a. The location if it rains and the location if it doesn't rain are within five miles of each other. (Lasersohn (1996:156))  
 b. Have students imagine the painting if the artist had used a completely different monochromatic color scheme.

(27a) は、「雨天の場合の場所と雨天でない場合の場所は互いに5マイルも離れていない」という解釈であるから、「場所が天候次第で確定する」という事態間の因果関係に基づいた条件表現となっている。(27b) の下線部は、「その画家が(現物と)全く異なった単色配列を用いていた場合の絵画」という解釈となる。したがって、仮にその作家が違う配色を施した場合、現実の絵画とは別の絵画が生まれたであろうことを想起させる。

前者は命題の真偽が確定していない、伝統的に「開放条件」と呼ばれる条件文がベースであり、後者は現実世界で真偽が確定している「反事実的条件文」がベースであるという違いはあるが、こうした「事態間の因果関係に基づく条件文」の意味するところは、概略以下のように図式化できる。



図(28)における  $t$  は時間を、 $X$  は条件を、そして  $R$  は条件成立による結果を表すものとする。よって、図(28)は、「時間  $t_1$  において、条件  $X$  が成立すれば結果  $R_1$  が生じ、条件  $\neg X$  が成立すると結果  $R_2$  が生じる」ということを意味している。これを(27a)のような開放条件文に当てはめると、「現在時  $t_0$  に位置する話者が、未来時  $t_1$  において条件  $X$  が成立した場合の結果  $R_1$  を予測する」ことを表す。この場合、「条件  $\neg X$  が成立した世界」も同時に喚起されるのが一般である<sup>(13)</sup>。(27b)のような反事実的条件文に当てはめると、「現在の事実を  $R_1$  とした場合、過去時  $t_1$  において条件  $X$  ではなく、条件  $\neg X$  が成立した場合の仮想上の結果  $R_2$  について述べる」ことを表す。いずれの場合も、「 $X$  の世界」に対して「not  $X$  の世界」が存在する、或いは想起されることが重要な特徴となる。

#### 4. 対比と差異化：対立領域・対立世界の喚起

ここで、3節で考察した接続詞について、その意味的特徴を簡潔にまとめると、次のようになる。

(29) a. **時の副詞節を導く接続詞の意味特徴**

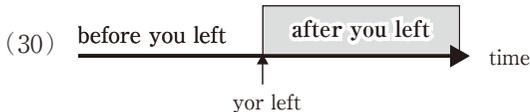
期間や時点など、いずれも時間軸上の「区切り」を表す。

b. **条件の if 節の意味特徴**

「条件  $X$  が成立する世界」を想定し、その条件の成立から生じる結果  $R$  に関心を寄せると同時に、その裏にある「 $\neg X$  の世界」の存在を喚起させる。

ここで重要なのは、形容詞節に転用できる副詞節を導く接続詞はすべて、何らかの形で「対立領域・対立世界」を有しているという点である<sup>(14)</sup>。

ここで、「対立領域・対立世界」という概念について具体的に説明しよう。まず、「時」の副詞節を導く接続詞に関して言えば、それらが導く節はすべて、時間軸上の「区切り」を示すという点に注目されたい。「区切り」があるということは、必然的に「時間軸上の領域を分割している」ことを意味する。例えば、after you left という節を考えてみよう。これは、時間軸上の一点で you left という事象が生じたことを意味し、さらにそれ以降の期間を指示する。分かりやすく図で示すと、以下のようなになる。



このように、after you left という節は、you left 以降の時間域に意識を向けると同時に、時間軸上の領域を「before you left の領域」と「after you left の領域」に二分しているのである。つまり、after X の領域には、必然的に「対立領域」として before X の領域が存在することになる<sup>(15)</sup>。逆に、before you left が言語化された場合、時間軸の領域を「before you left の領域」と「after you left の領域」に二分する点では after のケースと同じであるが、話者が you left 以前の時間域に意識を向けているという点で異なるのである。

同様の捉え方は、上で見た他の接続詞についても可能である。since X 「X 以来」の領域には、「X 以前」、つまり before X が対立領域として存在する。until X 「X まで」の領域には「X 以降」、すなわち after X の領域が存在する。while X 「X の間」、when X 「X の時」の領域にも、その外側の領域として「X 時以外」の領域が存在する。条件節 if X は、既に上で示唆したように、「条件 X が成立する世界」を想定するだけでなく、その対立世界である「¬X の世界」の存在を喚起させるのである。

以上のように、形容詞節に転用できる副詞節を導く接続詞は、いずれも「それと対立する領域（世界）」を喚起するものとなっている。これを規則の形でまとめると、次のようになる。

### (31) 形容詞節に転用可能な副詞節の意味制約

形容詞節に転用できる副詞節は、それを導く接続詞の基本義が、対立領域・対立世界の存在を喚起させるものでなくてはならない。

これが疑問 (5b) 「形容詞節に転用されやすい副詞を導く接続詞に共通する意味特性とは何か」に対する答えであり、そこからさらに疑問 (5a) 「一定の接続詞によって導かれる副詞節が形容詞節として機能しやすいのはなぜか」に対する答えを導くことができる。つまり、「対立領域・対立世界の存在を喚起させる節」が付加することによって、「名詞句の指示対象を同じ集合に属する他者と対比・差異化する」という機能を果たすのである。これにより、無標の形容詞節である制限的關係詞節と同様に、名詞を制限的に修飾することが可能になるのである。

「対比・差異化」という機能の重要性は、それを明示化した文脈で一層明確となる。

- (32) a. \* His criticism of the book before he read it (Chomsky 1970: 193)  
 b. His criticism of the book **before** he read it was in some senses more impressive than his criticism of the book **after** he read it.

デフォルトでは非文法的と判断される(32a)を(32b)のような文脈に入れると、問題なく容認されるようになる<sup>(16)</sup>。ここでは、before節とともにその対立領域であるafter節を言語化して対比関係を明示化しており、「彼がその本を読む前」と「彼がその本を読んだ後」でcriticismの内容が異なることを示唆している。その意味において、after/before節はcriticismの差異化に貢献しているのである。

逆に言えば、「対立領域・対立世界」を喚起しにくい意味の接続詞が導く副詞節は形容詞節に転用しにくい、という説明が成り立つ。例えば、because節は、事態間の因果関係の「原因」を表す場合、事実に的(factual)であり、「起きたこと(結果)」に対する説明として機能するため、通常は「他の可能な原因」を喚起することはない(cf. Dancygier and Sweetser (2005: 181))<sup>(17)</sup>。その意味において、because節は対立領域・対立世界を持たないので、名詞を対比・差異化する機能を果たすのは難しいということになるのである<sup>(18)</sup>。

## 5. 結語

以上、本稿は副詞節が形容詞節に転用される現象を考察対象として、(i)「時」、「条件」など、一定の接続詞によって導かれる副詞節に限って形容詞節として機能できるのはなぜか、(ii)その一定の接続詞に共通する意味特性とは何か、という2つの問いに対し、意味論的観点からアプローチしてきた。本稿が導き出した解答を簡潔にまとめると、以下のようになる。

- (33) 形容詞節に転用できる副詞節を導く接続詞には、「対立領域・対立世界の存在を喚起させる」という意味特性が共有されており、そのような意味特性を持つ接続詞に導かれた節が名詞句に付加すると、その指示対象が同じ集合に属する他者と対比・差異化されるから。

最後に、残された課題について1つ触れておきたい。それは、「時」の副詞節に関し、接続詞別に考察を一層深め、形容詞節に転用できる場合に満たすべき個々の厳密な認可条件を明らかにすることである。本稿でも所々示唆したように、たとえ形容詞節に転用できる副詞節であっても、無作為にどのような種類の名詞とも結びつくわけではない。この点は、節の要求するアスペクト特性と被修飾名詞の意味の関係が解決の鍵となりそうである。

## 【注】

- \* 本稿の作成にあたり、貴重なコメントをくださった目白大学・山田宣夫先生、筑波大学・廣瀬幸生先生、和田尚明先生、筑波大学大学院生・五十嵐啓太氏、そしてインフォーマントとして協力いただいた筑波大学・石田プリシラ先生に感謝申し上げます。本論の不備や誤りは筆者の責任によるものである。
- (1) 以下の議論において、特に出典元を明記していない例文は、ウェブ検索や作例によるものであるが、全てインフォーマントチェック済みのものである。また、例文中の下線や太字は、特に断りのない限り、いずれも筆者によるものである。
- (2) このような if 節は、Adnominal Conditionals (体言修飾条件文) と呼ばれている (cf. Lasersohn 1996、志澤 2010)。
- (3) 名詞を修飾する while 節には、前置詞 + 関係代名詞の形式 (during which) と交替できるものと、できないものがある。
- (i) a. The period {while/during which} I was waiting in the wings was in some ways difficult for me.  
 b. The TV shows {while/\*during which} we were kids always had slime and pies.
- (i) のように、during which と交替可能な while で導かれる節は、関係副詞節、すなわち (本来的な) 形容詞節であると考えられ、「副詞節の転用」ではないため、本稿では考察対象外とする。同様の理由により、at which/on which などと交替可能な関係副詞の when についても考察対象外とする。
- (4) 金谷 (2012:115) は、because が名詞句を修飾している例として以下を挙げている。
- (i) Below the surface ran a current of intrigue that ended with the assassination of Abraham Lincoln because he was determined that the United States be free from the bondage of the inter-national bankers.
- しかし、筆者のインフォーマントによると、少なくともこの文における because 節は、名詞句 the assassination of Abraham Lincoln を修飾する形容詞節としての解釈よりも、動詞 ended を修飾する副詞節として捉える解釈の方が自然であるという。また、筆者の調査では現在のところ because 節が動詞派生名詞ではない「本来的な名詞」を修飾していると思われる例は確認できていない。したがって、本稿は、because 節は形容詞節に転用することは (少なくとも他の副詞句に比べて) 難しいという立場で議論を進める。
- (5) Ross (1973: 141) によると、「名詞らしさの度合い」は概略次のように図示できる。
- that-clause > for NP to V > embedded questions > Accusative NP + V-ing > Possessive NP + V-ing > Action Nominal > Derived Nominal > **Noun**
- これは、不等号の右に行くにしたがって当該形式の名詞らしさが高いことを示しており (詳細は Ross (1973) を参照のこと)、本稿の考察対象となる被修飾名詞はこの表の右端 (太字で表記) ということになる。
- (6) 金谷 (2012) は本稿と比較的近い問題意識を持ちながら当該現象を論じ、非修飾名詞を中右 (1994) で言う「中核命題」を表す「コト名詞」であるとしている。その帰結として、いわゆる「モノ名詞」は副詞句で修飾できないと結論付けているが、次のような例をどう説明するかという点において、疑問が残る。
- (i) The location if it rains and the location if it does not rain are within five miles of each other.  
 (Lasersohn (1996: 156))
- (i) における location はあくまでも「場所」という「モノ」を指示する名詞であるが、if 節で修飾可能である。
- (7) 例えば、Ross (1973) は、since 節は名詞句 (注5の Derived Nominal、及び Noun) を修飾できないとしている。また、OALD など、一部の辞書で指摘される名詞修飾の while 節は注 (3) で触れた関係副詞の例である。

- (8) ここでいう「継続」は、動詞の内在的特性に起因していても、完了形のような表現形式に起因していても構わないものとする (cf. 今井・中島 (1978: 391))。
- (9) 大変興味深いことに、(15b) の *problem* を *long-standing* など時間の幅を想起する形容詞や、形容詞の最上級形で修飾すると、単数形でも容認されるようになる。
- (i) Despite one long-standing problem since we moved to Texas, [...]
- (ii) Despite the most serious problem since we moved to Texas, [...]
- (i) が容認されるのは、*long-standing* により「時間の幅」が明示されて、*problem* が一定の時間幅があると認識できる為である。そして、(ii) が容認される要因は、最上級が「他者との比較」を前提としている為である。つまり、「最も深刻な問題 (the most serious problem)」と言うからには、*since* 節で示された開始時以降の期間に、比較対象となるべき複数の *problem* があるはずである。この意味で、(15a) と並行的に「時間の幅」が想起され、*since* の「継続性」と矛盾がなくなるのである。
- (10) 「彼女が入室した瞬間に雰囲気が変わった」という文脈であれば、それは図 (24a) の解釈となる。
- (11) 体言修飾条件文の詳細は、Lasersohn (1996)、志澤 (2010) を参照のこと。
- (12) この *if* 節は、Quirk et al. (1985) で言うところの *sentence adjunct* に相当する。これは *if* 節に限ったことではなく、形容詞節への転用が認められる副詞節は一般的に *sentence adjunct* であることが指摘されている (cf. 金谷 (2012))。
- (13) Geis and Zwicky (1971) の「誘導推論 (invited inference)」に相当する。
- (14) ここで言う「対立」とは、「相反する」ということではなく、「対照可能な」という意味である。
- (15) ただし、この2つの領域は話者意識の中で同等の位置づけではない。あくまでも話者意識は、言語化された側の領域に向けられている。
- (16) 例 (32) の *criticism* は冒頭で考察対象外とした動詞派生名詞であるが、対比文脈で容認性が上昇するという事実に着目されたい。これは、当該現象の認可条件として、「非修飾名詞が命題的か否か」(cf. 金谷 (2012)) という点よりも、「副詞節が非修飾名詞を分類・差異化する機能を果たせるかどうか」が重要であることを示唆している。
- (17) これは、「*because* 節を対比することはできない」と主張しているのではない。ここでの主張は「*because* 節自体に対比を喚起させる意味特性はない」ということであり、対比に特化した文法手段を用いれば、当然対比を喚起することができる。
- (i) I cry not because I'm sad but because I love you.
- (18) 同様のことが、形容詞節に転用しにくい副詞節を導く他の接続詞 (e.g. *unless*, *even if* など) にも当てはまる見込みはあるが、詳細は稿を改めたい。

## 【参考文献】

- Chomsky, N. 1970. "Remarks on Nominalization." In R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum eds., *Readings in English Transformational Grammar*, 184–221. Mass.: Ginn and Company.
- Croft, W. 2001. *Radical Construction Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Danciger, B. and E. Sweetser. 2005. *Mental Spaces in Grammar: Conditional Constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Geis, M. and A. M. Zwicky. 1971. "On Invited Inferences." *Linguistic Inquiry* 2, 561–566.
- Haan, P. de. 1989. *Postmodifying Clauses in the English Noun Phrase: A Corpus-Based Study*. Amsterdam: Rodopi.
- 今井邦彦・中島平三. 1978. 『現代の英文法 5 文 (II)』東京: 研究社.
- 金谷優. 2012. 「副詞節による名詞句の修飾」『英語語法文法研究』第19号, 114–128.
- Lasersohn, P. 1996. "Adnominal Conditionals." *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory VI*, 154–166.
- McCawley, J. D. 1998. *The Syntactic Phenomena of English*, 2nd edition. Chicago: University of Chicago Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Ross, J. R. 1973. "Nouniness." In O. Fujimura ed., *Three Dimensions of Linguistic Theory*, 137–258. Tokyo: TEC.
- 志澤剛. 2010. 「Adnominal Conditionalsの意味論・語用論的認可条件」*JELS* 27, 257–266.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

(平成25年11月6日受理)